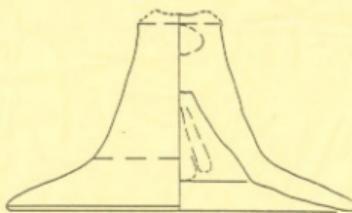


高知県香美郡

# 拝原遺跡試掘調査概報

(香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第3集)



香我美町教育委員会 1988.

## 序

香我美町山南地区県営圃場整備事業の計画地内に存在する拝原遺跡について、昭和62年11月9日より12月4日まで試掘調査が行われた。

当該地は、古来「オンブクジ」の通称で呼ばれたところであるが、今次調査によって縄文時代から中世に至る集落址の遺存していることが明らかとなつた。調査区に平行して走る県道稗地岩田線以北の丘陵地帯には、拝原城、岡城など中世山城が存在し、当遺跡との関連に興味がもたれるところであり、64年度以降実施されるであろう本調査に期待が持たれる。

また先に明らかとなった下分遠崎・十万遺跡の成果と共に、今日の香我美町を築き上げた祖先の生活・文化・生産・信仰が詳らかとなることは、誠に意義深いことである。

本調査に協力を頂いた地権者並びに、指導下さった高知県教育委員会文化振興課楠瀬陽介班長、出原恵三、吉原達生氏に深甚の敬意を表する次第である。

昭和63年3月

香我美町教育長 和田和夫

## 例　　言

1. 本書は、香我美町教育委員会が文化庁の補助事業として実施した、拝原遺跡試掘調査概報である。
2. 遺跡は、高知県香美郡香我美町上分拝原に所在する。
3. 調査対象面積は60,000 m<sup>2</sup>で、試掘調査面積は432 m<sup>2</sup>である。
4. 調査は、香我美町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が実施した。  
調査員　出原恵三（高知県教育委員会文化振興課主事）  
　　吉原達生（　　）  
事務担当　清藤正郎（香我美町教育委員会教育係長）  
測量　小松幹典
5. 調査にあたっては、地元土地改良区、南国耕地事務所、百田建設の全面的な協力を得た。記して深く謝意を表す。

## 本　文　目　次

I	調査に至る経過	1
II	地理的・歴史的環境	3
III	調査の方法	4
IV	調査概要(検出遺構と出土遺物)	4
1	グリット調査区	4
2	トレンチ調査区	4
(1)	Aトレンチ	4
(2)	Bトレンチ	4
(3)	Cトレンチ	9
(4)	Dトレンチ	10
(5)	Eトレンチ	10
(6)	Fトレンチ	10
(7)	Gトレンチ	12
V	まとめ	13

## 挿 図 目 次

Fig 1 : 周辺の遺跡分布 .....	2
Fig 2 : グリット及びトレンチ位置図 .....	5
Fig 3 : グリット(1.2.3 G)セクション .....	7
Fig 4 : B・C・Gトレンチセクション .....	8
Fig 5 : Cトレンチ遺構検出状況 .....	9
Fig. 6 : グリット2、B・Cトレンチ出土遺物 .....	10
Fig 7 : D~Gトレンチ位置図 .....	11
Fig 8 : D・E・Gトレンチ遺構検出状況平面図 .....	11
Fig 9 : SKI平面図 .....	12
Fig 10 : Gトレンチ出土遺物 .....	13

## 図 版 目 次

PL 1 : 拝原遺跡全景 .....	15
PL 2 : 1グリット完掘状況・同北壁 .....	16
PL 3 : 2グリット遺物出土状況・4グリット完掘状況 .....	17
PL 4 : 3グリット完掘状況・3グリット西壁 .....	18
PL 5 : 6グリット、8グリット完掘状況 .....	19
PL 6 : Bトレンチ、Eトレンチ遺構検出状況 .....	20
PL 7 : Gトレンチ遺構検出状況、SKI完掘状況 .....	21
PL 8 : Gトレンチ出土弥生土器、各トレンチ出土遺物 .....	22
PL 9 : 2グリット出土高杯、Cトレンチ出土扁平片刃石斧、SKI出土叩石 .....	23

## I 調査に至る経過

昭和61年度より香宗川中流域の農地66ヘクタールを対象とした山南地区県営圃場整備事業が開始され、農地の区画整理や道水路の系統的整備等によって、近代的農地に転換しつつある。

一方、当事業対象地区内には、原始時代以来今日までの香我美町を築き上げた祖先の営みの足跡とも言うべき、いくつかの遺跡、遺物散布地が確認されている。63年度の工事計画対象地である下分遠崎遺跡は、61年度に試掘調査を実施したところ、弥生時代の木製品等を多量に検出し、当地域における農耕成立期を明らかにしたことにおいて、多くの人々の注目を集めた。

今次試掘調査を実施した拝原遺跡も、從来から弥生時代～近世にかけての遺物散布地として知られているところであるが、近い将来近代化による変貌を遂げるところである。従って文化財保護部局としては、開発部局と協議を重ね埋蔵文化財の保護に努めなければならない。しかしながら開発行為の性格や事業施行の上で、やむを得ず失われる遺跡については、その範囲を最少限にとどめ、記録保存のための発掘調査を実施しなければならない。今次調査は、事業によって影響を受ける遺跡の範囲を最少限にとどめるための調整を開発部局と行うにあたって、基礎的資料となる遺跡の正確な範囲・性格・時代・遺物包含層の深度等を適格に把握するために実施するに至った。



Fig1 周辺の遺跡分布

名	遺跡名	時代	名	遺跡名	時代	名	遺跡名	時代
1	押原遺跡	縄文～中世	11	鳴子遺跡	古墳～古代	21	香宗我部城	中世
2	大崎山古墳	古墳	12	河内遺跡	"	22	国吉城	"
3	宮家城	中世	13	鳴子古墳	古墳	23	十萬遺跡	縄文～近世
4	安弘遺跡	弥生	14	幅山古墳	"	24	東十萬城	中世
5	城山城	中世	15	幅山遺跡	弥生	25	十萬城	"
6	福万城	"	16	的場遺跡	"	26	徳善天王古墳	古墳
7	前田城	"	17	岡城	中世	27	徳王子古窯址群	古代
8	東曾我遺跡	弥生～中世	18	押原城	"	28	徳善城	中世
9	下分遠商遺跡	弥生	19	神地遺跡	"	29	螢野古墳	古墳
10	中城	中世	20	岩神城	"	30	姫倉城	中世

## II 地理的・歴史的環境

拝原遺跡の所在する香我美町は、東西に長い弧状の海岸線を有する高知県のほぼ中央部、香美郡の南部にある。大半は四国山脈から派生した大小の山地に占められるが、海岸線に臨む南端部には、香宗川によって形成された沖積平野が開け、県下最大の穀倉を誇る香長平野に連なっている。遺跡の前を流れる山南川は、下流において北から流れてきた香宗川に合流するが、流域ではいくつかの小河谷平野を形成している。拝原遺跡のある香我美町岡・拝原は、山南川右岸に開けた東西に細長く伸びた小河谷平野の一つであり、海拔は15~20mを測る。

周辺地域の中で、生活の営みを今日に伝える最古の遺跡は、当遺跡西方900mの香宗川左岸に位置し、縄文時代晚期の土壙を検出した十万遺跡を挙げることができる。更に下流の底湿地(1)にある下分遠崎遺跡からは、弥生時代前期末~中期の多量の木製品や自然遺物が出土している。当地域における農耕社会の成立は、現段階においては前期末頃に求めることができよう。(2)また下分遠崎遺跡出土の弥生前期土器は、特異な型態を有するもので周辺地域の中・小平野部における弥生社会の成立過程を解明する上で重要な資料となっている。弥生時代の中期後葉頃になると平野部では遺跡が見られなくなり、的場遺跡や「神の塗」で有名な龍河洞遺跡のように海拔高い丘陵や山地に立地するようになる。しかしながら後期になると、再び低地に営まれるようになり、香宗川中流域に沿って東曾我遺跡や十万遺跡、河内遺跡等が出現する。また香宗川や山北川流域の斜面には、福山遺跡などの墓墳群が見られるようになる。

古墳時代前期の状況は不明であるが、中期に入ると徳王子に徳善天王古墳が出現し、後期には、蟹野古墳・赤坂古墳・幅山古墳等が造営され、県東部においては、南国市、土佐山田町に次ぐ分布密度を示している。また7世紀になると徳王子古窯址群が営まれるなど、当地域における継続的な生産力の発展のあったことを今日に伝えている。

律令体制下の香我美町は、「和名類聚抄」に記載のある大忍郷に包含されていたと考えられる。十万遺跡から8世紀~10世紀の居館・倉庫群が検出され、石鎧も出土するなど注目を集めているが、古代地方行政組織の末端につらなる豪族層の在地支配を窺わしめるものである。鎌倉時代には、大忍郷は莊園化して大忍庄と呼ばれるようになり、北条得宗家・横濱寺・有栖川家・熊野神社と領家を点々とするが、在地においては百姓名が成長発展していたことが資料に窺われる。香宗川上流域では、小河谷平野に沿って国広、清滝、正延等の地名が數珠つなぎになって残り、百姓名の存在を今日にまで伝えている。これら百姓名は、南北朝期を戦い貫くなかで小領主化し、国人層の台頭とも相俟って在地における対立抗争の渦中に巻き込まれる。十万遺跡に出現した二重の堀を巡らす方形館の出現と周辺に点在する山城の数々は、当地の状況を象徴的示している。小領主の多くは、やがて長宗我部傘下の給人となりいわゆる一領具足となつて初期封建体制を支えることになる。

### III 調査の方法

今次試掘調査の範囲は、一般県道幹地・中村線と山南川との間で、幅100m、長さ600m、面積60,000m<sup>2</sup>を測る東西に長い調査区である。試掘に先行して行った踏査で、調査区の西半分は遺物の散分が少く、東半分は遺物の散布状態が比較的密であった。従って西半分については、2m×2mの試掘グリッドを9個(G1～G9)設定し、遺物包含層の確認された1G・2G・3Gについては、基本層序を図化した。

東半分については、幅2m～4m、長さ11m～50mのトレンチを6本(ATR～FTR)を設定し、基本層序の観察、遺物包含層・遺構の有無等を確認した。検出遺構については、時代を確認するために一部発掘を行ったが、多くの遺構については写真と検出プラン図化後埋め戻した。

### IV 調査概要(検出遺構と出土遺物)

#### 1. グリッド調査区 (Fig 2,3)

1Gは、1.5m掘り下げて層序の観察を行った。耕作土以下N層まで粘質土～粘土が堆積しており、II層より弥生時代～中世、V層より弥生時代の土器細片が出土した。V層は無貴物層で湧水がある。

2Gは、現耕作土、床土の下に旧耕作土・旧床土が明瞭に確認できた。旧床土(N)の下に砂層(V層)が形成されているのは、山南川の氾濫によるものである。その下に厚い粘土層を挟んで、砂疊層となっている。I～V層まではほとんど遺物は認められないが、V層上面に土師器高环脚部(Fig 6-4)が単独で出土した。流れ込みと考えられる。この脚部は、外面はなめらかに外反するカーブを描くが、内面は継をなして屈曲する。端部は丸くおさめ、調整は器表の荒れが激しく観察不可能である。

G3は、G1と似た堆積をしている。V・V層より弥生時代～中世に至る土器細片が出土したが、図化できるものはない。VI層は、地山層である。

G4～G9については、30cm～40cm下げたところではげしい湯水があり、床土以下黒褐色の泥土となっている。遺物は、土器細片が少量出土したが、遺構の存在する基盤はないものと考えられる。

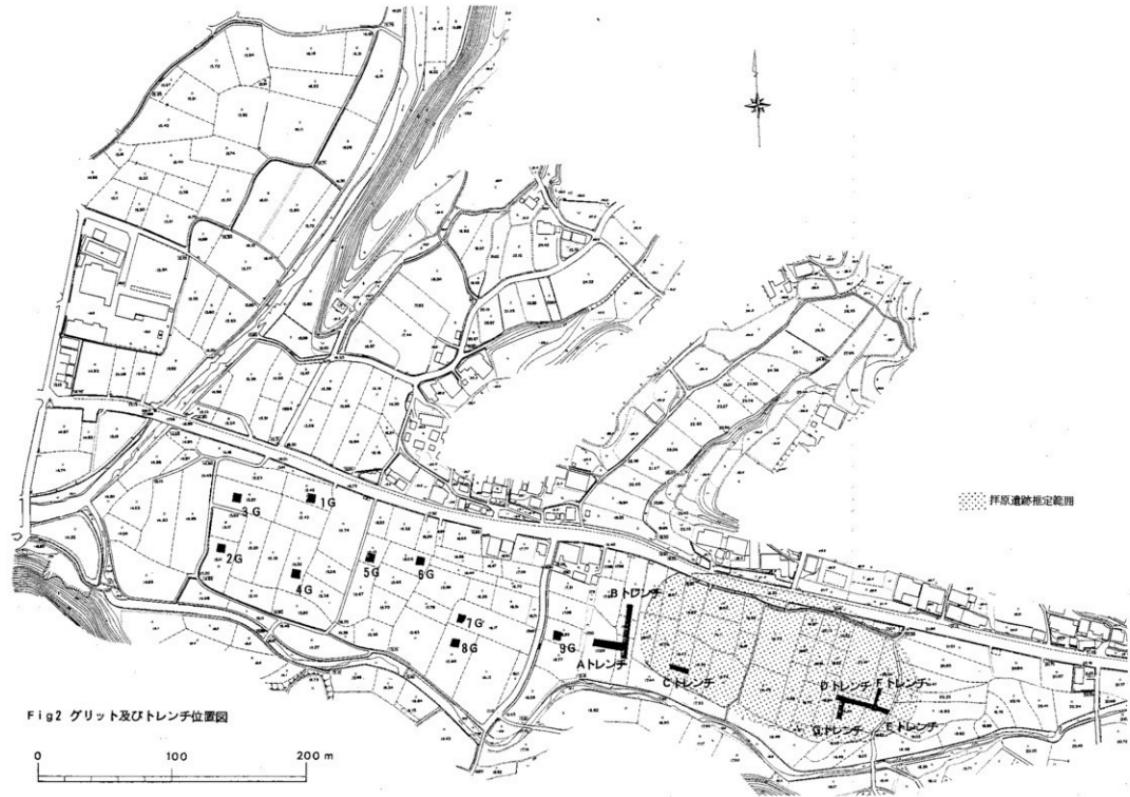
#### 2. トレンチ調査区

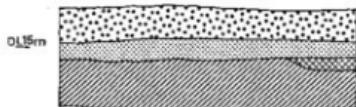
##### (1) Aトレンチ (Fig 2)

幅4m、長さ12mのトレンチである。現耕作土の下は、厚さ50～60cmの客土があり、その下は礫層となっている。客土中より弥生・須恵器・近世磁器の細片が出土している。遺物包層及び遺構の存在は認められない。

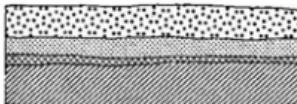
##### (2) Bトレンチ (Fig 4, 6-10)

幅2m・長さ40mの南北に長いトレンチであり、標高の異なる三段の棚田に設定した。下段



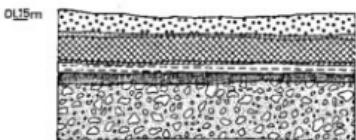


1 G 西壁セクション

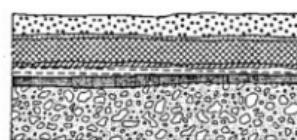


同北壁セクション

- I層：耕作土
- II層：黄灰色粘質土（旧耕土）
- III層：茶灰色粘土層（弥生～中世の遺物を多く含む）
- IV層：暗灰褐色粘土（弥生包含層）

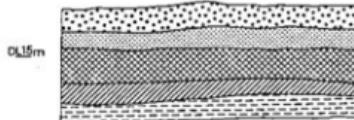


2 G 西壁セクション

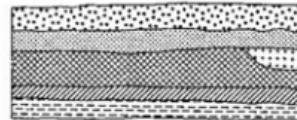


同北壁セクション

- |                  |            |
|------------------|------------|
| I層：耕作土           | V層：淡灰色砂層   |
| II層：床土           | VI層：灰褐色粘土  |
| III層：黄灰色粘質土（旧耕土） | （洪水の為か？）   |
| IV層：土（旧耕土）       | VII層：黄灰色粘土 |
| V層：旧床土           | VIII層：白    |



3 G 西壁セクション



同北壁セクション

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| I層：耕作土          | V層：暗灰色粘土    |
| II層：黄灰色粘質土（旧耕土） | VI層：淡黄灰色粘質土 |
| III層：黑褐色粘土      | VII層：灰褐色粘質土 |

Fig3グリット(G1・2・3)セクション ( $S = \frac{1}{40}$ )

と上段では、約80cmの比高差がある。Fig 4に示した地層断面図は、最上段のトレンチ西壁である。現耕作土下は、粘着性の強い粘土で堆積しており、IV・V層からは湧水がある。各層より少量の土器細片が出土しているが、安定した遺物包含層や遺構検出面は存在しない。また下2段については、地表下20~30cmで激しい湧水に見舞われた。Fig 6~10は、III層出土の白磁碗底部で、幅広く浅い削り出し高台を有し、森田分類N-1-a類に属する。

(3)

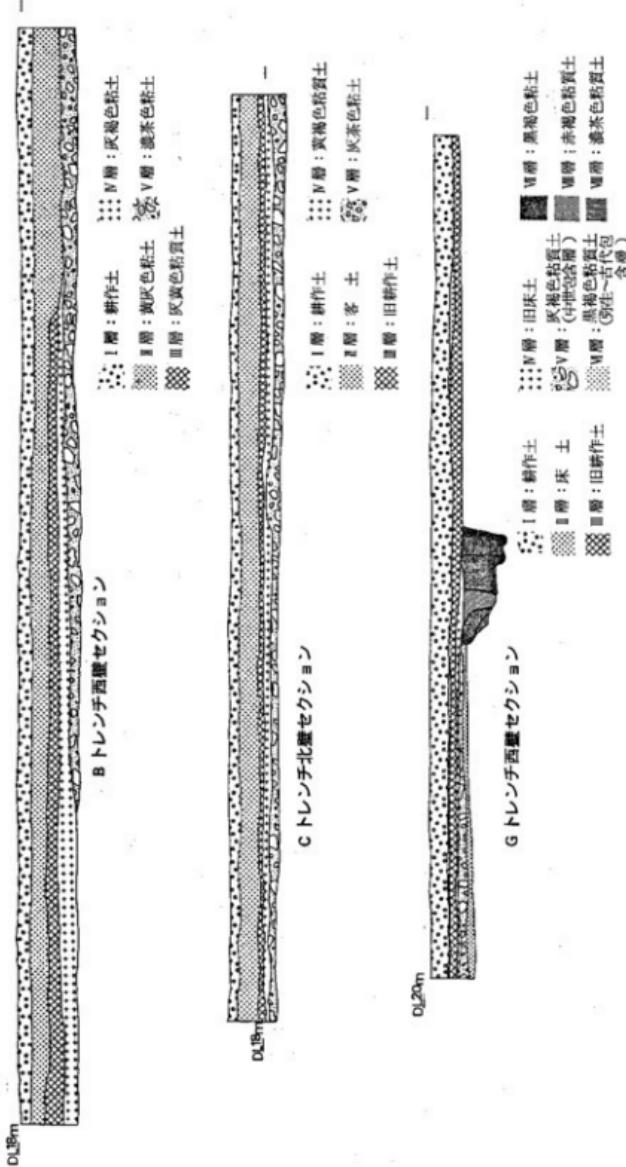
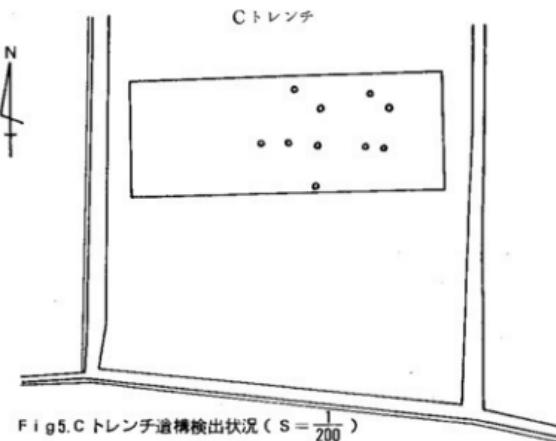


Fig 4 B・C・G ドレンチセクション

### (3) C トレンチ (Fig 4, 5, 6)

B トレンチの東方40mの地点に設定した幅4m、長さ11mの東西に長いトレンチである。地表高度は18.4mを測り、B トレンチ最上段面よりも更に50cmほど高い。耕作土を除くと、厚さ20~30cmの客土（Ⅱ層）があり、須恵器・土師器・土錐・扁平片刃石斧など多量の遺物が出土した。この客土は、近世の段階に水田の嵩上げを行なったもので、遺物が多量出土しているのは、近隣に存在したであろう遺跡の土壤を使っているためである。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は、中世の遺物包層で、Ⅵ層は旧耕作土である。Ⅶ層は、中世の遺構検出面で、11個のピットを検出した。ピットの埋土はすべて灰茶色粘質土で柱穴と考えられる。

客土出土の遺物は、8・9・12である。8は、須恵器杯蓋で口径13.5cmを測る。口縁部から丸味をもって立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面全面横ナデ調整を施す。9は、須恵器杯身で口径12.0cmを測る。立上りは内傾し、端部は丸くおさめる。受け部は水平な面をなす。12は、扁平片刃石斧である。基部の一部を欠損するがほぼ完形を保っている。長さ4.8cm・幅3.8cm・厚さ1.0cm・重量37gを測る。石材は粘板岩である。両主面共に丁寧に磨かれており、わずかに丸味を帯びている。基部にも両刃風片刃の痕跡が見られる。7は、Ⅲ層出土の土師器杯底部である。ロクロ成形であるがヘラ切りである。Ⅳ層出土遺物は、1・3・5・6である。1は土錐で長さ5.6cm・最大径2.5cmを測る。3は土師器把手で指頭圧痕が顕著に見られる。5は、白磁碗で口径11.2cmを測る。口縁部は外反し、内面が5~6mm幅で露胎している。また口縁部外面に目痕がある。K類に属する。6は、須恵器杯蓋で口径15cmを測る。天井部は平坦面をなし、口縁部にかけて直線的に傾斜する。口縁部内面は段状を呈す。V層出土遺物は、2・11である。2は、土錐で長さ3.3cm・径1.2cmを測る。11は滑石製石錐の底部である。



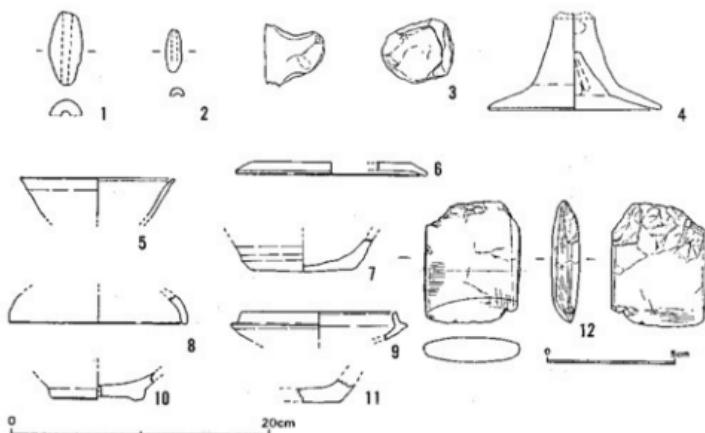


Fig 6 グルット 2、B・C トレンチ  
出土遺物 (12は半縮尺)

(4) D トレンチ (Fig 7, 8)

D トレンチは、C トレンチの東方 110 m の地点に設定した幅 4 m、長さ 50 m の東西に長いトレンチである。地表高度は、20.1 m を測り、C トレンチよりも 1.5 m 高い。耕作土と床土を除去した表土下 20~30 cm のところで、黄褐色粘土層に掘り込まれた多くのピット、土壤・溝状遺構を検出した。これらの遺構埋土は、灰茶色粘土と黒褐色粘土に大別することができる。前者は中・近世の遺構で、後者は古代及びそれ以前の遺構と考えられる。D トレンチは、検出状況の写真撮影と平面実測を行った後埋め戻した。

遺物は、床土及び検出面より弥生土器・土師器・須恵器等の細片が数多く出土したが、図示できるものはない。

(5) E トレンチ (Fig 7, 8)

E トレンチは、D トレンチの東隣りに設定した。幅 4 m、長さ 13 m の東西に長いトレンチである。地表高度は D トレンチと同様で、遺構検出面も耕作土・床土を除去した表土下 20~30 cm の黄褐色粘質土に掘り込まれていた。検出遺構は、ピット、土壤、溝である。遺構埋土は、溝を切っている小ピットが灰茶色粘質土であるが、他はすべて黒褐色粘質土を呈す。これらの遺構は、トレンチの西部に集中しており、中頃より東部には全く見られない。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器等の細片が出土しているが、図示できるものはない。

(6) F トレンチ (Fig 7)

F トレンチは、E トレンチと直交するかたちで設定した幅 2 m、長さ 10 m の南北に長いトレンチである。地表高度は E トレンチと同様である。耕作土・床土を除去すると D・E トレンチと同じ黄褐色粘土層に至ったが、遺構は全く認められない。遺物もほとんど見られない。

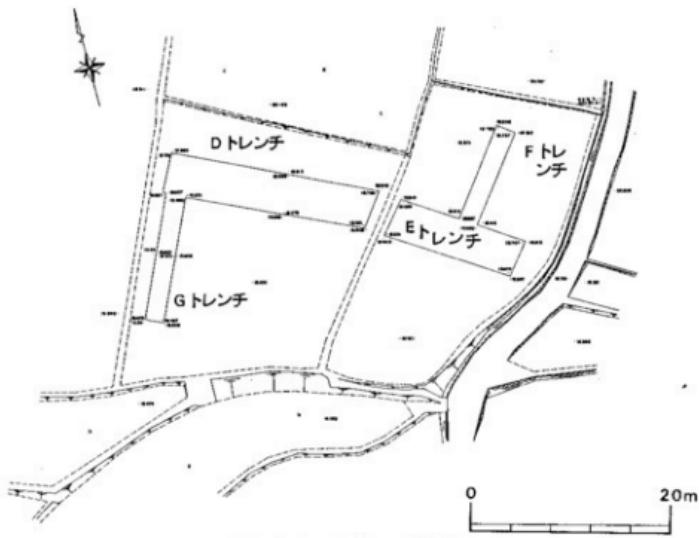


Fig 7 D～Gトレーニング位置図

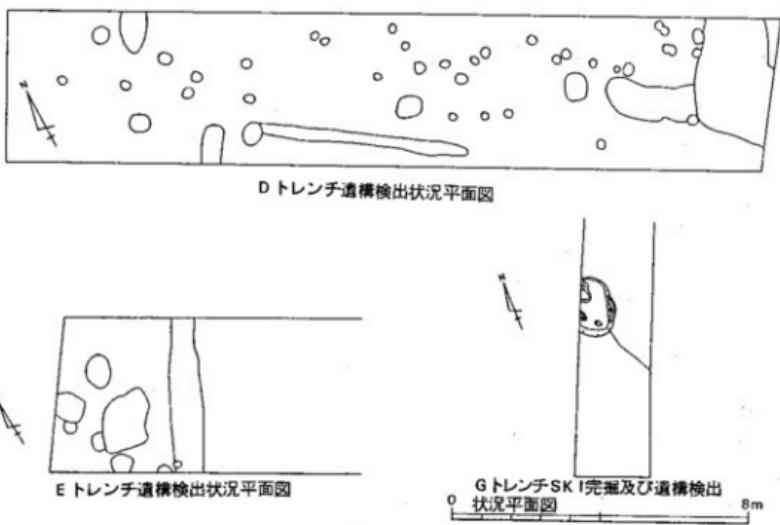


Fig 8 D・E・Gトレーニング遺構検出状況平面図

(7) Gトレーナ (Fig 4, 7, 8, 9)

Gトレーナは、Dトレーナに直交するかたちで設定した。幅2m・長さ12mの南北に長いトレーナである。基本層序は、床土の下に旧耕作土が存在し、トレーナ北半部では、この下が遺構検出面の黄褐色粘土となっているが、南半部では、旧耕作土の下に中世遺物包含層（V層）や弥生時代～古代の遺物包含層（VI層）が形成され、多くの大小土器片が出土した。

検出遺検は、トレーナ南端部で住居址と考えられる

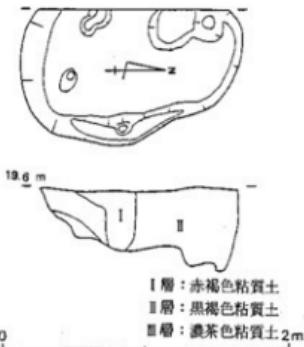


Fig 8 SK1平面図

埋土の広がりと、それを切る土壤（SK1）を確認した。このうちSK1については、トレーナの範囲内で発掘した。SK1は一部調査区外に出ているが、長軸1.6m、短軸1.0m以上、深さ40～50cmを測る不整楕円形のプランを有する土壤で、床面は3段に掘り込まれている。埋土はFigに示したとおりであるが、I層はSK1に後出したピットと考えられる。I層上層部において南に広がっているのは、柱抜きとりによるものと考えられる。

包含層出土遺物は、13～22及び25である。13は、縄文晩期の浅鉢と考えられる。わずかに内湾して立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。外面に2条の沈線を配し、上位の沈線部に径3mmの小孔を2孔焼成後に穿っている。胎土に0.5～2mm前後の砂粒を含み、黄茶色に発色する。また断面には、粘土帯の内傾接合痕を認める。14は、二重口縁を有する壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は面をなす。頸部外面にハケ調整がわずかに観察できる。15も壺の口縁部でラッパ状に外反する口縁部を有し、口唇部は面をなす。外面は縱方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整、頸部内面には、指頭圧痕が認められる。16・18は、壺口縁部で共に丸いカーブを描いて外反する。前者は、外面縱方向・内面横方向のハケ調整を施し、口唇部は丸くおさめる。後者は、口唇部が凹状を呈し、わずかに肥厚する。17は、鉢である。内湾気味に立ち立がり、口唇部は水平な面をなす。断面に粘土帯の内傾接合痕を認める。19は、壺底部で外面に平行叩きを施す。20は、八字状に開く高杯の脚部である。端部は丸くおさめ、外面はわずかにハケ調整が見られる。以上は、VI層出土の弥生後期土器である。21は、土錐で長さ3.3cm・径1.2cmを測る。22は、白磁碗底部で、幅広く浅い削り出し高台を有するものでN-I-a類に属する。胎土は緻密で釉は乳白色である。

(5)

SK1出土遺物は23～27で、すべて埋土II層からである。23は、須恵器高台付杯である。底面内面に幅1cm内外の粘土縫の単位が認められる。高台は、外方に張り出し端部が内外に肥厚し疊付は幅広な面をなす。また底部外面の高台接合部には、2条の細い沈線を巡らし接合を強固たらしめている。24は、土師器の瓶である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。内外面に指頭圧痕が見られる。25は、土師器壺で底部は丸底になる。器壁が厚く、内外面

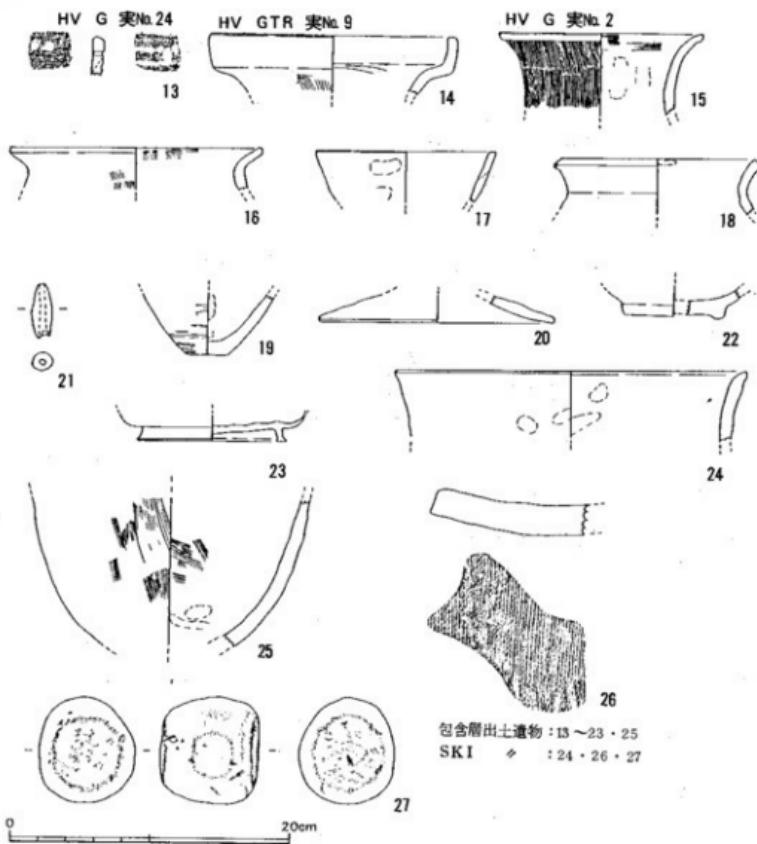


Fig. 10G トレンチ出土遺物

無造作なハケ調整を施す。26は、平瓦である。凹面部の布目は消失しているが、凸面部には繩目が明瞭に見られる。27は、叩石で重さ 61.3kg を測る。河原石を利用したもので3面に使用痕が認められる。

## V ま と め

以上の試掘調査結果を具体的に述べた。グリット調査区は、西端部の1~3Gで弥生~中・近世の遺物包含層が確認されたが、他のグリットでは認めることができなかつた。1~3Gは、調査区の中で最も標高の低い所にあるため、確認された包含層は、二次堆積による可能性が考

えられる。ただ3Gについては、黄褐色粘土質の地山層が形成されているために、周辺に遺構の存在する可能性がないとは言い難い。トレンチ調査区では、Cトレンチ以東について、弥生～中・近世に至る遺物包含層が形成せられており、その下層には、古代～中世の堅穴住居・土塙・溝・ピットが検出された。の中でもD・E・Fトレンチでは、遺構が濃密に分布している。遺構の分布状態に、地形的な状況を踏えて遺跡の範囲を推定するとFig2に示すように、東西400m、南北200mの約8,000m<sup>2</sup>前後になるものと考えられる。

唯一発掘したGトレンチのSK1からは、古代の瓦が出土している。地元の伝承によると付近には、「オンブク寺」なる寺院が存在していたと言うことであり、興味深い現象である。また当遺跡より900m下流の香宗川左岸の十万遺跡からは、14棟の建物群を擁する古代豪族の館が検出されており、出土遺物からSK1と同時期の所産であり、当然両者の関連性が考えられる。今後拝原遺跡は、香我美町の古代史像を復元する上で重要な位置を占めることになろう。

(註)

- (1) 香我美町教育委員会 「十万遺跡発掘調査報告書」香我美町埋蔵文化財調査報告書第2集  
1988年
- (2) 香我美町教育委員会 「下分・遠崎遺跡発掘調査報告書」1987年
- (3) 森田 勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4  
1978年
- (4) " "
- (5) "

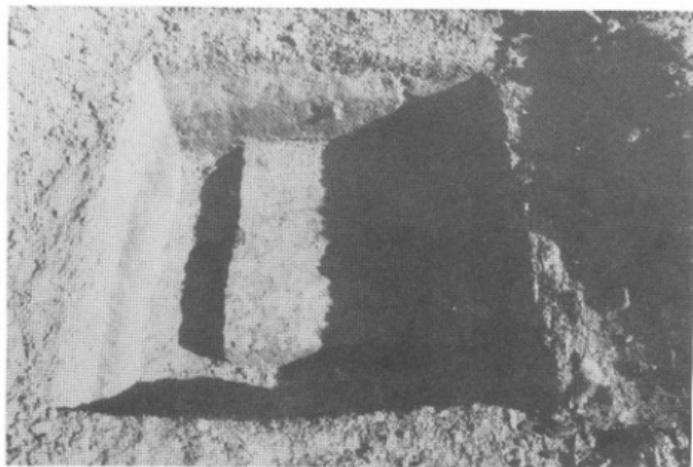
# 図版



拝原遺跡全景（南より）



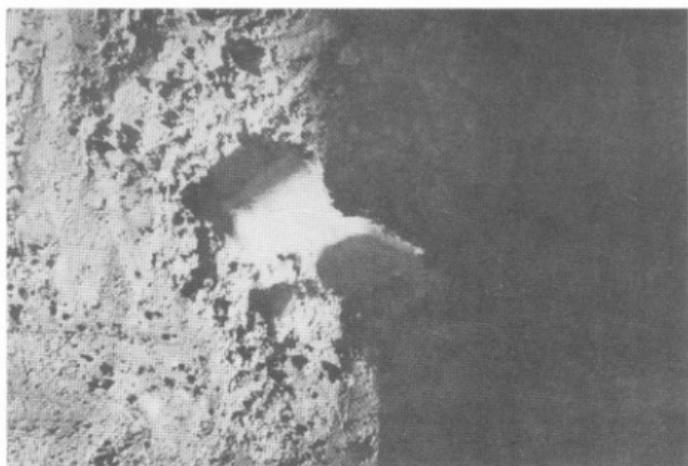
拝原遺跡全景（東より）



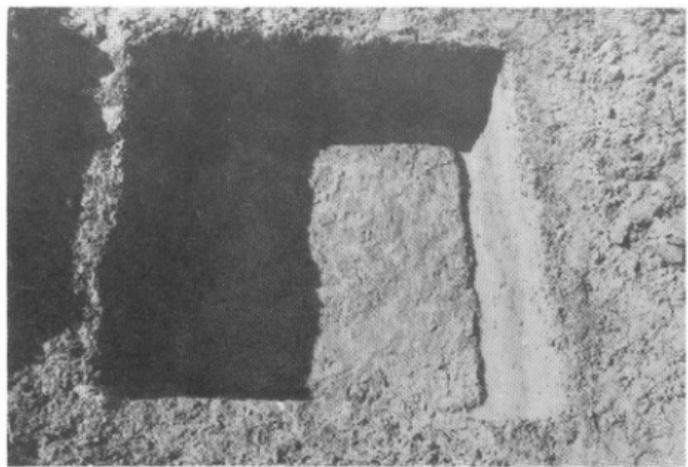
1 グリット 完掘状況



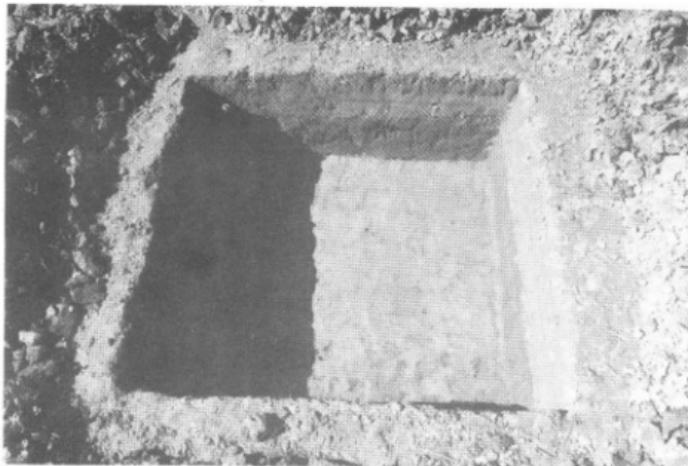
1 グリット 北壁



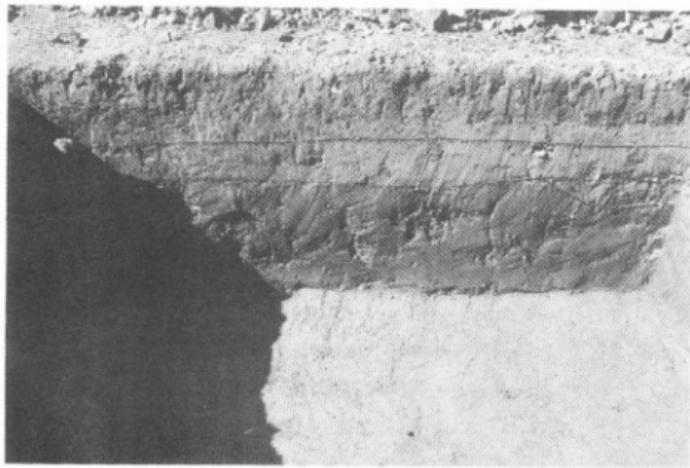
2 ゲリット遺物出土状況



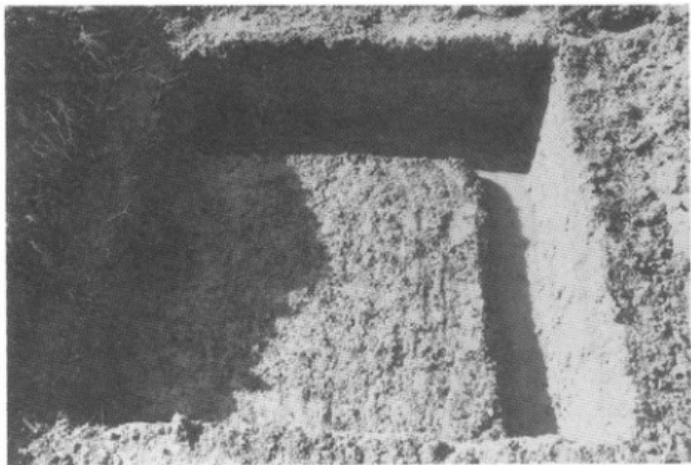
4 ゲリット完掘状況



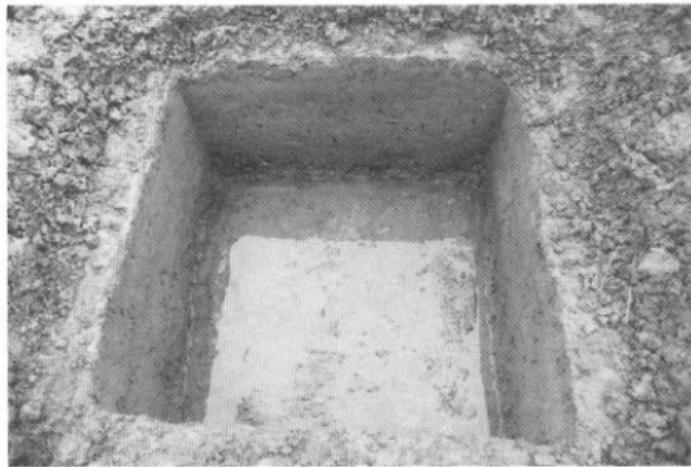
3 グリット完掘状況



3 グリット西壁



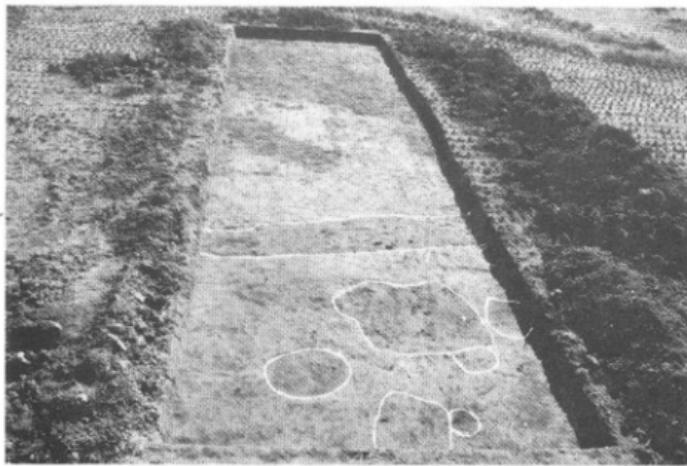
6 グリット完掘状況



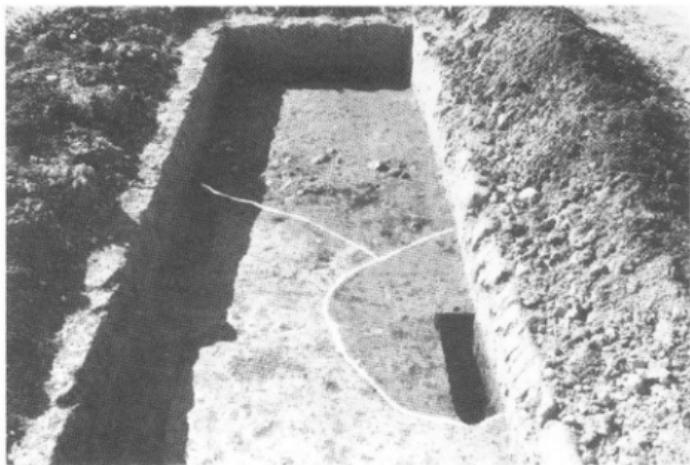
8 グリット完掘状況



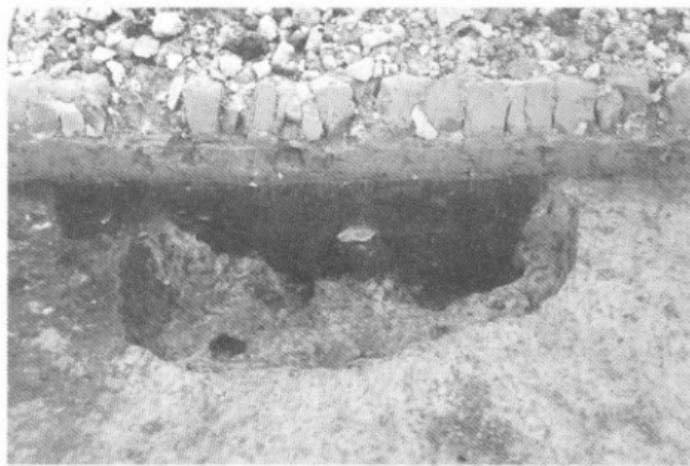
B レンチ 遺構 検出 状況



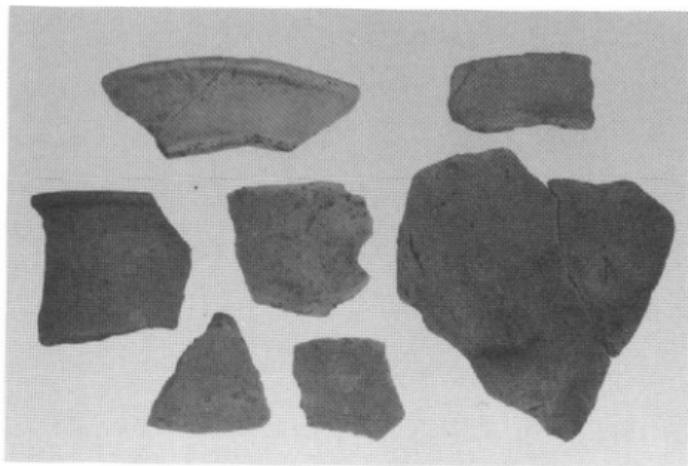
E レンチ 遺構 検出 状況



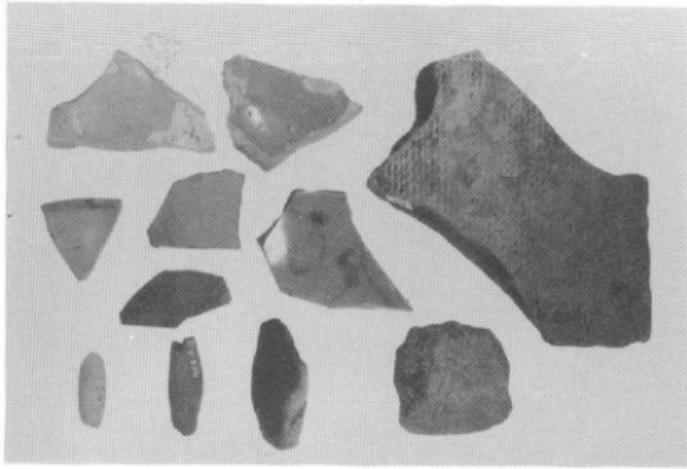
G トレンチ 遺構検出状況



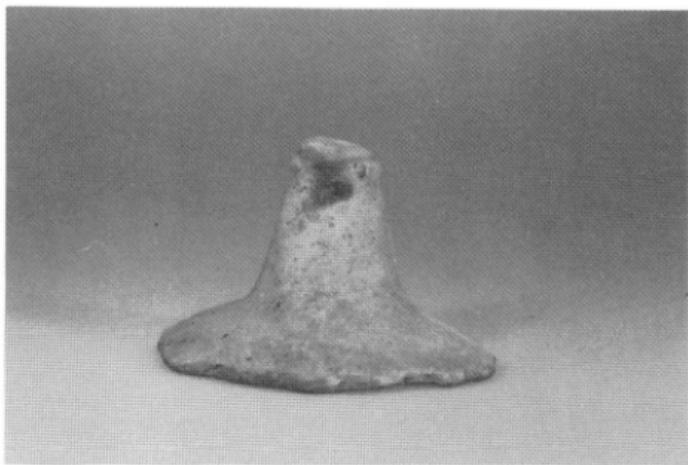
SKI 完 堀 状 況



G トレンチ出土弥生土器



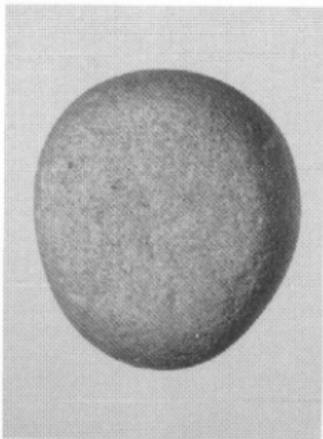
各トレンチ出土遺物



2 グリット出土高杯



C トレンチ出土扁平片刃石斧



SK I 出土叩石

高知県  
拝原遺跡調査報告書

1988年3月

香我美町教育委員会  
(高知県香美郡香我美町徳王子)

印刷 近森謄写堂(高知市升形8-1)